

認知症になっても安心して暮らせる社会を

月刊 POLE-POLE (スワヒリ語)

# ぼ～れぼ～れ

ゆっくり やさしく おだやかに



「ぼ～れぼ～れ群馬県支部版」

わたぼうし

No.502

## 認知症の人と家族の会

## 理念

認知症になったとしても、介護する側になったとしても、人としての尊厳が守られ日々の暮らしが安穩に続けられなければならない。認知症の人と家族の会は、ともに励ましあい助け合って、人として実りある人生を送るとともに、認知症になっても安心して暮らせる社会の実現を希求する。

### 巻頭言

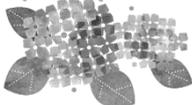
#### 500 人近い人の命が失われた現実

6月5日、警察庁は昨年1年間に警察に届け出があった認知症の行方不明者は、18,121人、(前年比918人減)だったと発表しました。

昨年行方不明の届け出が出されたものの、発見に至らなかった人が273人、亡くなった状態で見つかった人が491人あったとも報じられました。(朝日新聞板倉大地記者記事抜粋)

私は前年より届け出がわずかながら減少したことよりも、一年に500人近い人の命が失われたという現実の重みを改めて痛感させられました。行方不明の方のご家族の、発見までの或いは生死が分かるまでの心労を思えばとても少ないとは言えません。また、亡くなった方の8割近くが5キロ圏内で見つかっているという事実も印象に残りました。

こうした悲劇を減らすために私たちのできることは、認知症の基礎知識を学んだ認知症サポーターをもっと増やし「気づきと声掛け」の見守りの輪を広げることに尽きると考えています。皆さんはこの調査報告をどのように受け止められたでしょうか。(関連記事4頁)



### 目次

- ・巻頭言 500人近い人の命が失われた現実 1頁
- ・群馬県支部総会報告 決算報告 2頁
- ・今年の認知症の日記念行事のご案内
- ・「家族の会」本部総会報告
- ・新役員体制発足 家族の権利宣言採択 3頁
- ・分科会報告
- ・高見国生初代代表を偲ぶ会
- ・渡辺俊之先生へわが家の認知症ケア手帳(61) 4頁
- ・妻はどこへ探し続ける男性の思い 4頁
- ・編集後記 4頁

### 7月の予定

- 7月12日(土) 伊勢崎つどい 10時～12時 伊勢崎市文化会館
- 7月13日(日) 渋川つどい 10時～12時 渋川市中央公民館
- 7月19日(土) 館林つどい 10時～12時 館林市中部公民館
- 7月27日(日) 県央つどい 10時～12時 県社会福祉総合センター 7階 701会議室

### 電話相談

- ◎群馬県支部(群馬県からの委託事業) 認知症の人と家族のための電話相談 027(289)2740
- ◎本部フリーダイヤル 0120(294)456

X(旧 Twitter)

やっています



5月25日 2025年度群馬県支部総会を開催  
2024年度活動報告・決算  
2025年度活動計画・予算を承認



今年の総会では、6月の本部総会の代議員として、田部井代表、恩田副代表（現地参加）、田中直子世話人（オンライン参加）を選任しました。

総会後の世話人会では、今年開催するアルツハイマーデー記念行事について時間を割いて話し合いました。

「家族の会」の存在が専門職の方にも知られていない、その活動内容もつと知られていない現状がある。ピアサポート、家族の思いや願いを理解していただくために、下の段に示す講演会を開催することになりました。

呼びかけ 本当に必要な支援とは

「話したら楽になりました」、「聞いてもらってよかった」

目の前の問題がすぐに解決しなくても、負担が軽くなったように感じる瞬間があります。反対に、解決への具体的な方法を示してもらったのに、心が萎んでゆくように感じることがあります。

では、「支援」とはなんなのか？『ナラティブ・ソーシャルワーク』（支援しない支援の方法）の著者荒井浩之先生とともに考えます。

公益社団法人認知症の人と家族の会群馬県支部

2024年度決算書

収入の部

会費収入	284,000円
認知症研修	58,476
アルツハイマーデー	50,000
委託事業収入	1,410,910 (内170,910円未収金)
県社協補助金	127,350
生命保険群馬県協会	300,000
支部活動支援資金	57,547
寄付金収入	195,000
雑収入・受取利息	361
合計	2,483,644円

支出の部

認知症研修	68,010	旅費交通費	1,765
		通信運搬費	3,000
		消耗品費	1,396
		印刷製本費	5,006
		諸謝金	50,116
		租税公課	2,327
		雑費	4,400
その他研修	1,795	旅費交通費	1,795
アルツハイマー	220,601	会場費	18,620
		旅費交通費	21,240
		通信費	38,761
		消耗品	8,873
		印刷費	66,088
		諸謝金	66,819
		雑費	200
機関誌	80,670	通信費	43,870
		印刷費	21,400
		消耗品費	15,400
普及啓発	4,169	消耗品費	4,169
電話相談	1,145,740	会場費	1,720
		旅費交通費	957,000
		通信費	91,612
		消耗品	9,566
		印刷費	2,000
		諸謝金	27,842
		租税公課	56,000
つどい	262,809	会場費	50,540
		交通費	163,245
		通信費	26,940
		消耗品費	5,415
		印刷費	16,669
情報収集	250	通信費	250
管理費	481,007	会議費	7,500
		交通費	200,098
		通信費	101,054
		光熱水費	43,210
		什器備品	27,892
		消耗品	40,137
		印刷費	49,980
		謝金	5,568
		雑費	5,568

合計 2,265,051円

当期収支差額 218,593円

前期繰越額 783,404円

次期繰越額 1,001,997円

上記の通り、相違ありません。

2025年4月19日

監事 糸野 望子

認知症の人と家族の会 群馬県支部主催

2025認知症の日（アルツハイマーデー）記念講演

認知症ケア専門家  
3単位取得講座

認知症の人と家族を支える  
支援とは

2025年9月21日(日曜)  
13:00~16:15 (12:30開場)

群馬県社会福祉総合センター 8階ホール

参加費：一般 500円（当日会場にてお支払いください）

：家族の会会員 無料

定員：100名

申し込み：Peatixサイト または 裏面FAXにてお申し込みください

<https://kazokugunma-nintisyounohi2025.peatix.com>



「話したら楽になりました」「聞いてもらってよかった」  
目の前の問題がすぐに解決しなくても、負担が軽くなったように感じる瞬間があります。  
反対に、解決への具体的な方法を示してもらったのに、心が萎んでゆくように感じることもあります。  
では「支援」とはなんなのか？『ナラティブ・ソーシャルワーク』（支援しない支援の方法）の著者  
荒井浩之先生とともに考えます。

第二部 記念講演

第一部 「家族の会」の役割  
「つどい」と「家族の会」の紹介

『ナラティブ・アプローチの立場から考える  
本当に必要な支援とは』

介護家族の語らいの場である  
「つどい」雰囲気や悲喜交々、  
模様形式でお見せします

クライアントが抱える問題の主人公はクライアント自身です。支援者  
にできるのは、その言葉に耳を傾け、同じ場所、同じ時間、同じ物語  
を共有すること。このような考え方をナラティブ（物語）・アプロ  
ーチと言います。福祉の現場には今、「支援しない支援」が必要なの  
ではないかと思えます

講師：荒井浩之 / 駒澤大学教授

1973年群馬県生まれ  
早稲田大学大学院修了 博士（人間科学）  
駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻教授  
著書『ナラティブ・ソーシャルワーク』（支援  
しない支援の方法）（新泉社）  
共著『ソーシャルワーカーのミライー混濁の中  
にそれでも希望の種をまく』（生活書院）ほか  
多数



後援：厚生労働省 群馬県 日本認知症ケア学会

群馬県社会福祉士会 群馬県介護福祉士会 群馬県介護支援専門員協会

群馬県ホームヘルパー協議会 群馬県看護協会

協賛：群馬県地域密着型サービス連絡協議会

\*群馬県社会福祉協議会社会福祉振興基金対象事業

「認知症の人と家族の会」群馬県支部 〒371-0843 群馬県前橋市新前橋町13-12 群馬県社会福祉総合センター7F

Tel: 027-289-2740 Mail: misato@xp.wind.jp <http://www.ninchishokazoku-gunma.jp>



就任のあいさつをする川井元晴新代表理事(左)と、和田誠新代表理事(右)

●公益社団法人認知症の人と家族の会

〓 結成 50 周年を控え、新役員体制発足

○ 2025 年度(通算第 16 回) 総会 6 月 7 日

○ 結成 45 周年記念レセプション 6 月 7 日

○ 2025 年度支部交流分科会 6 月 8 日

○ 高見国生初代表を偲ぶ会 6 月 8 日

家族の会総会が開催され、群馬県から世話人の恩田初男、田中直子、

田部井康夫の 3 名が得代議員として参加しました。

〈本部役員体制を一新〉

この総会で最も大きな変化は、役員体制が一新されたことです、鎌田松代代表が勇退し、山口県支部代表の川井元晴医師と福井県支部の和田誠さんが新しく共同代表に就任しました。また、

副代表は、杉山孝博神奈川県支部代表が顧問に勇退し、花俣ふみ代埼玉県支部代表が継続に加え、新たに丹野智文さん、志田信也さん(山形県支部)の三人体制となりました。認知症と診断されている丹野智文さんの副代表就任も特筆されます。

〈認知症の人とともにある

家族の権利宣言〉を採択

次には、「家族の権利宣言」を採択したことが挙げられます。この「宣言」は 5 項目から成っています。

- 1 家族一人ひとりの尊厳が尊重されること
- 2 家族が共に安心して暮らせる社会の実現を保障すること
- 3 家族が必要な支援を受けられること
- 4 社会全体で支え合うこと
- 5 家族の経験が社会で活かされること

「家族の会」が 2 年越しで議論してきた過程においては、本人との対立構造を生むとの懸念の声がありました。

しかし、私はそうは思っていませんでした。

家族の権利は、先に成立した認知症

基本法の第 3 条(基本理念)の第五項に、認知症の人に対する支援のみならず、その家族その他(以後家族等)に

対する支援が適切に行われることにより、認知症の人及び家族等が地域において安心して日常生活が営めるようにすること、と述べられていることを具

体化したものに他ならないと思っ

〈支部交流会・第三分科会〉

「三本柱」つどい、会報、

電話相談」に参加して

副代表 恩田初男

総会二日目(6月8日)には、3つに分かれて支部交流会があり、私は標記の第三分科会に参加しました。

この支部交流会は例年、各支部の人たちとのグループワークによって情報交換を行っています。私のグループは北海道、千葉、石川、愛知、島根、長崎のメンバーで三本柱の情報交換を行いました。

「つどい」についての意見交換では、開催回数に大きな差があり、愛知県では年間 432 回と圧倒的で、参加人数も 4,000

人を超える状況でした。開催場所は認

知症疾患医療センターのある病院 5 か所、他にも名古屋病院等で 3 か所にて毎月開催しているとのことでした。

また、参加者が多い千葉県では、千葉市等の広報に掲載してもらっていることで、参加者が多い要因になっているとのことでした。

ほかの支部の活動について知ることができたので大変有意義でした。



故高見国生 元代表

〈高見国生初代表を偲ぶ会〉

「家族の会」の生みの親、初代表の高見国生さんは 2024 年 6 月 10 日入院加療中の病院で亡くなられました。

高見元代表は、ご自身の介護の経験から、介護家族の手助けとなる民間デイセンターを群馬県支部が立ち上げたことを高く評価してくださり、デイセンター 30 年誌にも「群馬県のスタッフたちと共に生きてきた」との言葉を寄せて下さいました。

この偲ぶ会で直接お別れを告げることができ、やっと胸のつかえをおろせたと思います。ありがとうございます。

(田部井康夫)

渡辺俊之の「わが家の認知症ケア手帳」(61)  
公的機関とつながり孤独防ぐ

渡辺医院院長(精神科医、当会顧問) 渡辺俊之



私の外来には、高齢の母親や、一緒に暮らす未婚・無職の息子、娘の患者さんが来ています。母親から「私に何かあったら、先生、この子お願いしまし」と頼まれたり、息子から「母がいなくなったら生きていけない」と言われたりします。

つながりが希薄な家族は、そうはいきません。対応が後手後手になってしまっています。

問題が生じる前から公的機関とつながりを持っておくことが大切です。その中心的役割を担うのが「地域包括支援センター」で、各地域に必ず配置されています。介護保険サービスの利用や健康、家族のことなどの相談にのったり、必要な機関・窓口を紹介してくれます。読者の皆さんにも将来に不安を持っている人がいるかと思えます。近くにある地域包括支援センターに、まずは連絡を取ってみてください。

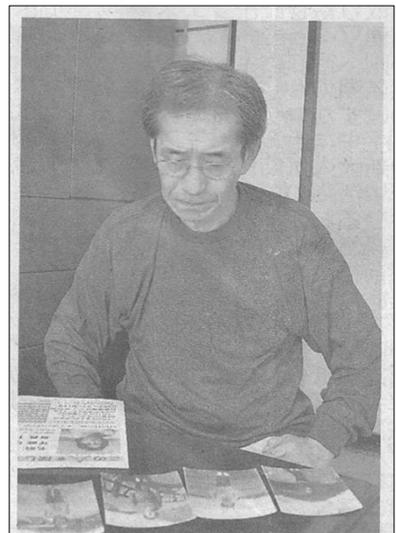
「8050(70代)問題」ということを聞いたことがある読者も多いと思います。親が80(70)代、未婚・無職で引きこもっている子どもが50(40代)になり、社会的に孤立して生活に行き詰まってしまう状態です。単身高齢者や高齢夫婦と比べ、子どもがいる世帯には民生委員などを通じた公的支援が行き届きにくいいため、共倒れの状態になってしまふことがあります。

私の外来に来ている親子は、医療や福祉とのつながりが持てるので、高齢の母親が病気になったり、認知症を発症したりした時には、訪問看護の導入やグループホームへの入居を勧めるなどして支援できます。しかし、外との

相談室



妻はどこへ探し続ける男性の思い(6月6日付朝日新聞より)



行方不明になった妻の写真を眺め「帰ってきて欲しい」と話す荒川勉さん＝2023年11月、鳥取県米子市、奥平真也撮影

\* 荒川勉さんは「家族の会」鳥取県支部の会員さんで今年の総会でも胸中を語って下さいました。

「安否も居場所もわからない。この苦しみはなった人でなければわからない。ずっと悔やんでいます。おそらく私が死ぬまで」

鳥取県米子市の荒川勉さん(66歳)の妻泰子さんは、2023年8月8日早朝、家から姿を消していた。今も行方不明だ。

当時59歳、若年認知症と診断されてから3年ほど経った頃だった。言葉はうまく出てこなくなっていたが、家事はこなしていたし、一人で毎日夕方の散歩に行くことを日課にしていた。

以前にも数回、ふらつといなくなったことがあったが、いずれもすぐに見つかった。だからその時も油断していた。

通っていた介護施設のスタッフら

と一緒に市内を捜し、防災無線でも情報提供を呼びかけたが見つからず、警察に届け出たのはその日の昼頃、家から徒歩数分の県境を越えて島根県に入っていたことが国道のカメラで分かったのは、翌日の午後だった。(朝日新聞伊木緑記者記事以下略)

編集後記

梅雨入りの宣言と同時に真夏を上回るような猛暑の襲来です。皆さん、くれぐれも熱中症には「用心ください」。

(田部井康夫)

